

高校階層とネットいじめの実態に関する実証的研究

—— いじめの問題に対する生徒指導の視点から ——

仏教大学教育学部教授 原 清 治
華頂短期大学、佛教大学非常勤講師 浅 田 瞳

抄 録

いじめに対する社会の目線はますます厳しさを増している。2013年6月28日には「いじめ防止対策推進法」が制定された。国や地方自治体はいじめに対する防止基本方針を速やかに策定し、いじめに対して学校や地域はどのように対応すべきなのか、明示することが求められている。

本研究で注目したのは、高校階層という学力変数を視野に入れながら、学校ごとに異なるネットいじめの被害の実態とそれを規定する要因である。そこで、近畿圏の高等学校8校に対してアンケート調査を実施し、高校によってネットいじめの発生率に大きな差異が生じていることを明らかにした。データ分析からは、①ネットいじめの「発生率」は高校階層による差異は小さく、むしろ学力上位校、中下位校ともにネットいじめの高い学校や低い学校が存在していること、②ネットいじめの「発生要因」には高校階層によって差が見られること、③一般に、ネットいじめの発生率の低い学校では、家庭や生徒同士の対面のコミュニケーションをとっている割合が高く、高校入学時にはすでにケータイを所有している生徒が多いこと、が明らかとなった。

I. 学校をとりまくさまざまな問題の とらえ方とネットいじめの発生

現代の子どもたちは多くの問題に直面している。たとえば、「いじめ」などがそれにあたる。文部科学省によるいじめの発生件数データの推移をみると、2013度において約18万5,803件、2012年度において19万8,109件となっており、1学校あたりのいじめ発生件数は約5件⁽¹⁾となっている。こうしたデータの直前の2011年度は7万231件であり、単純に数字だけを見ると、この数年でいじめが大きく増加したように見える。これは「いじめ防止対策推進法」の制定によっていじめを調査する組織や、認知するための調査方法が学校ごとに確立されたこと

と無関係ではない。いじめの件数は、「実際にいじめがあったかどうか」ではなく、年に複数回実施されるアンケートなどによって被害者の側に立った数字の報告へと変化した。それは、「いやな思いをしたことがある」といった声があげやすくなったことによる増加とみるべきであろう。

また、平成18年には文部科学省によるいじめの定義が「①自分より弱いものに対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない」から「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。なお、起こった

場所は学校の内外を問わない」と変更されており、ここでも、いじめは「発生件数」ではなく「認知件数」と統計の数値の単位が変更されている。

このように法律の制定やいじめ定義の変更とともに、いじめの発生件数に関する数値は変化しているが、いじめ調査が実施され始めた1985年以降、一定の数値を保ち続けて現在に至っており、生徒指導もこの問題を抜きにしては語れないほど大きな学校病理のひとつとなりつつある。

仮に「昔のいじめ」と「今のいじめ」が異なるとすれば、それは何が要因となっているのだろうか。生徒指導をする場合、かつてのように、いじめを被害者と加害者だけの関係として取り扱うことはもはやあり得ない。森田洋司・清永賢二(1994)はいじめが当事者だけではなく、「観衆や傍観者をも含めた四層構造論」⁽²⁾にあることを指摘し、いじめの当事者による解決を望むことは難しいことを論じた。すなわち、いじめはクラス全体、学校全体で解決すべき課題であり、いじめ被害者や加害者に対する指導だけでは不十分ということである。

今日のいじめ問題に注目したとき、その背景には、子どもたちの人間関係の構築方法に変化があることが読み取れる。ここでは生徒指導の3つの視点から読み取ってみたい。

ひとつめは、場の「ノリ」や同調圧力による仲間関係の「希薄化」である。内藤朝雄(2009)は、中学生の小社会において「いま・ここ」が「正しさ」の基準となり、みんなのノリにかなっていることは「よい」ことだと感じられてしまい、「その場その場のみんなのノリをおそれ、かしこみ、うやまう」傾向が強いことを指摘している。⁽³⁾すなわち「市民社会の秩序や個と個の親密性」などというような社会規範を振りかざして生徒指導を行おうとしても、子どもたちにとっては、共同生活の「その場その場」で動いていく「いま・ここ」こそが大切なのである。

それが大人社会のもつ「正しさの基準」と相いれるものではなく、むしろ自分たちの「ノリの国」を汚すものとして理解されている。すなわち、「いじめはダメだ」ということはわかっているが、それは「その場のノリでふざけた」という子どもたちの同調圧力の前には黙殺されるという指摘である。

2つめに仲間グループの閉鎖性がある。こうした子どもたちのグループの閉鎖性を宮台真司(1994)は「島宇宙化」と表現する⁽⁴⁾。宮台は若者の集団が分断化され、「現在では2～4人くらいの小グループに分断されていて、それぞれが教室を超えたつながりを、街の中で(クラブやパーティ)、あるいはメディアを通じて」⁽⁵⁾もつようになったことを指摘している。これがまさに「宇宙」空間に浮かんでいる無数の「島」のごとき形状をしているというのであろう。したがって、相互の島々の間には「驚くほどの無関心しかない」⁽⁶⁾ことになる。以前であれば、子どもの友人関係は「勉強ができる」「おしゃれをする」「運動ができる」といった共通の価値観を有しており、グループ内だけでなくグループ間のコミュニケーションは比較的とりやすい状況にあった。しかし、最近ではグループによって重要視する価値観が大きく異なっているのである。例えば、「音楽が好き」というグループと「野球が好き」というグループには共通する価値観がなく、両者はまったく別のグループであり、自分たちとは異なる相手のグループとコミュニケーションを取るきっかけもほとんどないといった実態がそれである。結果として、グループ内でのコミュニケーションは促進されるが、それ以外の友達との関わりが急速になくなり、結果として、子どもたちのグループはそれぞれ独立したものとなり、お互いのグループに関わることも減じられてしまうのである。生徒を指導する際に、他者に関して無関心ではいけない、などという表現はあたらず、グ

ループ内には関心があり、外には無関心という実態を理解の方がよいのかもしれない。

3つめに、学校内での子どもたちの人間関係としての「スクールカースト」の実態がある。鈴木翔（2012）はクラス内に暗黙のうちに存在する上位、中位、下位グループという階層分けを「スクールカースト」と定義し、クラス内の人気、（戦績がよい、あるいは人気のある）部活動に入っている、コミュニケーション能力の高さ等によって階級は規定され、グループの力関係がいじめの土壌になることを指摘した⁽⁷⁾。さらに、スクールカーストは小学校高学年より子どもたちに認識されはじめ、小学校では個人間の地位の差、中学・高校では所属するグループの差として理解されるという。したがって、小学校では個人の能力を基盤としてカーストが形成されるのに対し、中学校や高校では自分がどのグループに所属しているのかによってカーストが決定してしまうのである。子どもたちは自分の所属するグループによって「空気」を読み、カーストにそった行動をとることが多い。また学年が上昇するほど「コミュニケーション能力」や「生きる力」といった「ポスト近代型能力」⁽⁸⁾と呼ばれる、個人の努力では変えることが難しい力によってスクールカーストが規定されるため、下位グループに一度所属してしまうと、抜け出す方略を子ども自身が見出すことは難しいとされている。

上述したように、現代の子どもたちの人間関係は、「ノリ」を重視することによる普遍的な価値観の低下、島宇宙化したことによるグループ間の交流の減少、スクールカーストによるグループ間の序列制といった閉塞的な状況にある。ゆえに、大人がイメージする「友人」と子どもたちの認識との間には大きな離れがみられることも、いじめ問題に対する理解をより複雑なものにしているといえる。

これまでのいじめ研究を土台として、筆者を代表とする研究グループはケータイ電話などを介したネットいじめの研究を進めてきた。子どもたちへのケータイの普及率は高校生においては9割を超えており、子どもたちをとりまくインターネット環境はこの10年で大きく変化した。それと同時に2000年代後半より子どもたちのネット利用の危うさやネットいじめと呼ばれるトラブルが報告されるようになっていく。小学生から高校生までを対象とした調査において、ネットいじめに遭った子の割合はどの学校教育段階でも1割を超えており、「ネットいじめはケータイ利用やネットに詳しい一部の子どもとの問題」とは断言できない事態となっている。（詳しくは「ネットいじめの実態とその背景」『現代のエスプリ』No.529、2011を参照のこと）。

本研究では、調査対象を高校生に限定し、ネットいじめの発生率の違いに注目した。調査対象を高校生に限定した理由は以下の2つである。

ひとつめは、高校生の階層による違いを明らかにするためである。子どもたちが居住する場所によって通学する小中学校とは異なり、高等学校は受験を経て入学するため、高校階層が存在する。主な進路として大学進学が前提となる進学校と、就職も含めた多様な進路が選択できる進路多様校（以下多様校と略）では、対象となる高校生の質も異なっている。両者を比較することで、高校生のネットいじめの特質がより精緻に分析できるのではないかと判断したからである。

2つめに学校ごとの特徴を明らかにするためである。前述したように高等学校は学校ごとの特徴が大きく分かれている。同じ「多様校」にカテゴライズされる学校であっても、生徒指導に重点を置いている学校もあれば、キャリア教育に力を入れている学校も存在する。そうした学校ごとの分析を行うことにより、学校の特徴

がネットいじめの発生率に影響を及ぼしているのかを明らかにするためである。

本論文では、「進学校と多様校ではネットいじめの量や質に差が見られる」を仮説とし、高校階層と学校ごとにネットいじめやケータイ利用に関する項目を比較し、ネットいじめの低い学校とそれ以外の学校を分岐する要因としてどのような変数が影響しているのかを明らかにしたい。少しだけ結論を先に述べるならば、高校生の段階になるとケータイ所有の有無はネットいじめの引き金にはなりえないが、利用するアプリやケータイをいつ所有したのかという時期によっていじめ被害のリスクが軽減されること、また、保護者や友人との対面コミュニケーションを積極的にとる生徒が多い学校ほど、ネットいじめの被害が低くなっていたのである。

II. 調査の概要および結果

本論文で調査対象として取り上げる高校生の属性は次のとおりである。

【調査対象】 近畿圏A県下に在住する高校生
5,094人

【調査期間】 2013年4月～2014年8月

【調査方法】 自記式質問紙調査法、ホームルーム時に実施・回収

【分析方法】 統計パッケージSPSS Ver.22.0

	N	%
男	2,424	47.7%
女	2,666	52.3%
合計	5,094	100.0%

II-1 対象校全体の特徴

まず学校別のネットいじめの発生率を見て見たい。

表1をみると、学校によってネットいじめの発生率に大きな違いがみられることがわかる。

表1 学校別ネットいじめ発生率

A高	B高	C高	D高	E高	F高	G高	H高
8.0%	7.1%	4.5%	9.9%	9.7%	11.2%	10.8%	5.3%
(進学校)				(多様校)			

A～D高の4校はいわゆる大学進学を主としている進学校であるが、高校階層として同じ進学校であってもネットいじめの発生率の高いD高と低いC高では5%以上の開きが見られる。同様に、E～H高の4校は、先ほどの4校と比べると高校階層は下位に位置した多様校であるが、こちらもネットいじめの発生率が高いF高と低いH高に大きな開きがあることがわかる。

次に、調査対象のケータイの所有率について明らかにしてみたい。表2は学校別のケータイ所有率を明らかにしたものである。

これをみると、G校を除く多くの学校はスマートフォン（以下スマホと略）の所有が7割を超えていることがわかる。反対にガラパゴスケータイ（以下ガラケーと略）と呼ばれるこれまで主流のケータイは高校生にとってケータイの主流ではなくなっていることがわかる。どの高校であっても両者の合計は100%近く、もしくは100%を超えており、ケータイを所有していない高校生はかなり珍しいと判断してよいだろう。ケータイを「持たない」ことは高校生にとって友人とやりとりをするコミュニケーションツールとして欠かせないものであり、友人関係にも影を落とすといった自由記述も見られ、彼ら彼女らにとって手放せないものになっていることがわかる。

ここで指摘しなければならないことの一つに、ケータイの所有の多さはネットいじめの発生と直接関係していないことである。これまで原を代表としたネットいじめの研究において、小学生段階ではケータイの所有率とネットいじめの被害の割合は一定の相関関係を示していた⁽⁹⁾。したがってネットいじめを抑止する方略の一つとして、保護者がケータイをある時期

まで渡さないことは、一定の効果を持っていたのである。ところが、表2のデータをみると、スマホの所有率の低いG高のネットいじめの割合は決して低くなく、むしろ他校とくらべても高くなっている。スマホはガラケーよりもSNSを代表としたネットへのアクセスを前提としたケータイであり、ネットいじめが起こりやすいと想起しやすい。しかし、G高やネットいじめの低いC高、H高のデータを見ると、高校生においてケータイ所有の低さがネットいじめの低さとは相関しておらず、所有そのものがネットいじめのリスクを高めるとは言えないことがわかる。

しかし、ケータイの所有時期においては、小学校データと同様の傾向を指摘できる。次の表3は学校別のケータイ所有の時期を明らかにしたものである。

これをみると、ネットいじめの低いC高やH高においてはケータイの所有開始時期が「高校生」と答える割合が他の高校階層と比べて高くなっている。

特にH高においてはケータイを所有したのは高校生になってからという生徒が78.6%もあり、ネットいじめの被害が少ない要因として指摘できる。ネットいじめに遭うリスクを減じるために、なるべく所有開始時期を遅くするという方略は、高校生のデータからも見えるのである。

それでは、高校生が日常生活で使っているアプリはどのようなものがあるのだろうか。表4は学校別のアプリを「毎日10分以上使っている」割合を表したものである。

これをみると、twitterとLINEの利用率がどの学校でも高くなっていることがわかる。とくにLINEについては9割を超える学校もあり、高校生におけるSNSツールとして浸透していることがうかがえる。同様に、twitterについても、7割近くの生徒が使用している学校もあるため、こうしたSNSアプリの利用については、学校ごとに実態を把握し、生徒指導の資料として活用することが求められるだろう。一方で、欧米を中心に利用の進んでいるfacebookについ

表2 学校別ケータイ所有率

	A高	B高	C高	D高	E高	F高	G高	H高
スマート フォン	71.9% (n=695)	75.1% (n=861)	79.9% (n=529)	90.4% (n=927)	91.3% (n=285)	91.0% (n=212)	54.7% (n=94)	88.0% (n=541)
ガラケー	26.4% (n=255)	22.5% (n=258)	19.9% (n=132)	10.2% (n=105)	10.6% (n=33)	11.2% (n=26)	44.8% (n=77)	10.2% (n=63)

表3 学校別ケータイ所有開始時期

	A高	B高	C高	D高	E高	F高	G高	H高
小学校 以前	0.2% (n=7)	0.6% (n=7)	0.3% (n=2)	0.5% (n=5)	0.7% (n=2)	0.0% (n=0)	0.6% (n=1)	0.7% (n=4)
小学校 低学年	7.1% (n=64)	7.6% (n=84)	6.3% (n=40)	7.8% (n=77)	9.7% (n=29)	11.6% (n=26)	3.6% (n=6)	1.2% (n=7)
小学校 高学年	20.1% (n=180)	20.4% (n=225)	16.6% (n=105)	16.4% (n=162)	26.4% (n=79)	21.4% (n=48)	20.4% (n=34)	1.9% (n=11)
中学生	36.6% (n=328)	41.1% (n=452)	40.9% (n=258)	43.8% (n=433)	38.8% (n=116)	46.9% (n=105)	35.9% (n=60)	17.6% (n=103)
高校生	5.5% (n=318)	30.2% (n=333)	35.8% (n=226)	31.5% (n=312)	24.4% (n=73)	20.1% (n=45)	39.5% (n=66)	78.6% (n=460)

表4 学校別アプリ利用率

	A高	B高	C高	D高	E高	F高	G高	H高
twitter	28.8% (n=267)	39.3% (n=441)	50.2% (n=315)	56.3% (n=546)	69.9% (n=207)	68.4% (n=147)	43.3% (n=74)	55.4% (n=310)
facebook	9.4% (n=86)	8.6% (n=95)	5.5% (n=34)	3.9% (n=36)	3.3% (n=9)	6.3% (n=12)	9.9% (n=17)	13.0% (n=68)
LINE	65.1% (n=613)	83.9% (n=833)	76.3% (n=495)	85.6% (n=864)	92.7% (n=280)	86.1% (n=199)	35.1% (n=60)	84.2% (n=497)
youtube	34.1% (n=321)	35.4% (n=399)	43.5% (n=283)	40.9% (n=398)	49.5% (n=148)	44.7% (n=96)	40.1% (n=69)	48.0% (n=274)

(「毎日2時間以上」「毎日10分以上」使っている割合を抽出)

表5 学校別ネットいじめ内容(複数回答可)

	A高	B高	C高	E高	F高	G高	H高
中傷メール	20.0% (n=15)	22.8% (n=18)	21.4% (n=6)	28.6% (n=8)	28.0% (n=7)	22.2% (n=4)	10.3% (n=3)
ブログ プロフ	37.3% (n=28)	41.8% (n=33)	53.6% (n=15)	42.9% (n=12)	24.0% (n=6)	55.6% (n=10)	79.3% (n=23)
学校 裏サイト	2.7% (n=2)	2.5% (n=2)	3.6% (n=1)	7.1% (n=2)	8.0% (n=2)	0.0% (n=0)	3.4% (n=1)
個人情報	8.0% (n=6)	19.0% (n=15)	17.9% (n=5)	3.6% (n=1)	12.0% (n=3)	22.2% (n=4)	0.0% (n=0)
画像流出	8.0% (n=6)	6.3% (n=5)	10.7% (n=3)	7.1% (n=2)	8.0% (n=2)	5.6% (n=1)	0.0% (n=0)

(※D高については複数回答に○がなかったため省略)

ては、あまり利用されていないことが明らかとなった。高校生は本名で登録しなければならないfacebookよりも、LINEのような閉鎖性の高い仮想空間やtwitterのように複数のアカウントを使い分けることが可能なSNSを好むといえるだろう。

それでは、学校ごとのネットいじめの内容としては、どのようなものが見られるのであろうか。表5はネットいじめの被害者を100%としたときのネットいじめの内容を示したものである。

これをみると、どの学校においても「ブログ・プロフ」においてネットいじめに遭っている生徒がもっとも多くを占めることが明らかと

なっている。近年のSNSの普及によって自分のプロフやブログを所有する子どもは減少しているが、彼ら彼女らが小学生から中学生にかけて、自分のHPを所有することが一種のステータスのように扱われる時期が存在していた。ゆえに、小中学生時代にネットいじめにあった高校生の多くはブログやプロフなどの自分が所有するHPにネットいじめを受けていたといえる。

ブログ・プロフや中傷メールなどの被害者個人に対して直接誹謗中傷を行うようなネットいじめは、学年の上昇にしたがって少なくなっている。それと引き換えに増えているのが、個人情報や画像の流出といった被害者本人が気づきにくいタイプのネットいじめである。これにつ

いては、高校階層に限らず、どの学校でも一定数存在していることがわかる。とくにLINEやtwitterといったアプリで個人情報が漏えいするケースは全国いたるところで報告されており、本調査をおこなったいくつかの高校においても、アンケート調査直前にネットいじめが発生し、調査期間が遅れてしまうこともあった。そこでのネットいじめの大半はSNSへの個人情報や誹謗中傷の書き込みであり、自由記述でも同様のことを指摘する高校生は少なくなかった。「大人の目に触れないところでネットいじめがされている」という高校生のコメントが、ネットいじめの特質を示しているといえるだろう。

II-2 進学校における分析結果

それでは、ネットいじめの被害に遭いにくい学校にはどのような特徴が見られるのであろうか。ここでは、進学校と多様校に高校階層を区分し、それぞれの特徴について明らかにしてみたい。

表6は学校ごとにネットいじめに遭わない生徒の特質を明らかにした重回帰分析の結果である。

これをみると、どの学校においてもtwitterやニコニコ動画を利用している生徒はネットいじめの被害に遭うリスクが高くなっていること

がわかる。これらのアプリやサイトについては高校生が自由に書き込みができるため、意見の相違が起こりやすく、ネットいじめの被害に遭いやすい構造になっていると指摘できるだろう。これはどの学校においてもおおむね同じ傾向が見られ、生徒に対して注意喚起を促す必要がある。

しかし、C高がネットいじめに遭いにくい傾向として特筆すべき項目を見つけることはできない。有意差の見られるtwitterやニコニコ動画は他校でも同様であり、C高のみの特徴と指摘できないのである。そこで、ネットいじめに遭うリスクを従属変数のまま、独立変数を個人の特性に置き換えた重回帰分析を行った結果が表7である。

まず、ここで指摘しなければならないのは、表6と比較して R^2 の値がどの学校も高くなっており、ネットいじめのリスクを考えた時、ネット利用よりも個人の特質に注目した方が予見しやすいということである。ネットいじめはネット上でのやり取りによって生じるため、どうしてもネット利用の制限によって一定の効果が見られると考えられがちである。しかし、表7のデータを見ると、ネット利用よりも個人の特性によってネットいじめに遭うリスクが高くなっていることが指摘できる。

すなわち、ネットいじめはネット上における

表6 ネットいじめ「なし」を規定する要因（ネット利用に関する変数のみ）

	A高	B高	C高	D高
スマートフォン所有	.026	.069	.010	.104 *
ガラケー所有	-.050	.084	.005	.185 ***
ケータイ所持時期	-.063 +	-.058 +	-.030	.059 +
twitter	-.127 **	-.074 *	-.123 *	-.037
facebook	-.023	-.044	.006	-.086 *
LINE	-.045	.030	.037	-.077 *
ニコニコ動画	-.064 +	-.147 ***	-.113 **	-.101 **
youtube	-.037	.030	.015	.022
ルール	.013	.035	-.016	-.008
R^2	.044	.041	.032	.039

表7 ネットいじめ「なし」を規定する要因 (個人の特性に関する変数のみ)

	A高	B高	C高	D高
いつも遊ぶグループがある	.031	.116	.018	.021
悩みは友達に相談する	.063	-.070	.073	.036
面と向かって話をしたい	-.016	-.042	-.126 **	-.034
自分は友だちが多い	.006	-.110	.007	.029
ケータイ等は使いこなせる	-.257 **	.133 +	-.032	-.065
ケータイがないと不安	.024	-.068	.007	-.030
中学時代いじめられていた	-.202 **	-.132 *	-.130 **	-.158 ***
中学校は荒れていた	-.075	-.078	.000	-.044
家族との会話は多い	.137	.098	.016	-.024
友達との会話はSNSが多い	.027	-.116	-.011	-.040
学校のことを保護者に話す	-.220 +	.147	.050	.012
友人のことを保護者に話す	.237 +	-.054	-.067	-.041
ケータイのことを保護者に話す	.009	-.094	-.009	.001
配布プリントを保護者に渡す	.021	.000	-.041	.082 *
朝起きたら家族にあいさつ	.041	.070	.017	-.008
朝食は保護者と一緒に食べる	-.007	-.094	-.057	-.011
夕食は保護者と一緒に食べる	.011	-.073	.074 +	.041
一人より友だちと一緒に楽しい	-.034	.209 **	.049	-.003
外へ出かけることが多い	-.081	-.047	.028	-.053
近所の人にあつたら挨拶する	-.007	-.015	-.032	.043
自分は「いじられキャラ」	-.059	-.010	-.068	-.040
R ²	.173	.125	.053	.067

まったく見ず知らずの人間から受けるものではなく、教室や部活動などの見知った人間関係から起因するものであるという示唆である。本調査においてもネットいじめの被害者の多くは、誹謗中傷の相手は「特定できる」と7割以上の高校生が回答しており、友達関係からのネットいじめが多いことが指摘できる。したがって、ネットいじめの被害についても、「被害者がどのような特質をもっているのか」という項目が、ネット利用に関する項目よりも、影響力が強いのである。とりわけ、どの学校においても「中学時代いじめられていた」生徒はネットいじめの被害に遭うリスクが高くなっており、有意差も認められることから、ネットいじめは現実世界のいじめの延長線であることを指摘できるだろう。

そして、ネットいじめの割合の低いC高の特

質として、「友達とは面と向かって話をしたい」「夕食は保護者と一緒に食べる」生徒ほどネットいじめの被害を回避していることである。4つの高校の中でも、C高においては日常生活においてSNSではなく直接のコミュニケーションをとりたいと考えている生徒がネットいじめの被害に遭っておらず、結果として他校よりもネットいじめの被害に遭いにくい構造となっていることが明らかとなった。

Ⅱ-3 進路多様校における分析結果

それでは、学力中下位にあたる多様校におけるネットいじめの要因について明らかにしてみたい。次の表8は表6と同じ分析をE高、F高、G校、H高に行った結果である。

これをみると、進学校とは少し異なった傾向が見られる。進学校においては、どの学校であっ

表8 ネットいじめ「なし」を規定する要因（ネット利用に関する変数のみ）

	E高	F高	G高	H高
スマートフォン所有	.037	-.115	.187	-.131
ガラケー所有	-.036	-.107	.007	-.041
ケータイ所持時期	-.054	.049	.083	-.052
twitter	-.005	.062	.203 *	.150 **
facebook	.244 ***	.140 +	-.017	.021
LINE	.072	.050	.088	-.122 *
ニコニコ動画	.075	.016	.108	-.045
youtube	-.024	.022	.109	-.002
ルール	.042	.072	.027	.061
R ²	.073	.067	.099	.035

表9 ネットいじめ「なし」を規定する要因（個人の特性に関する変数のみ）

	E高	F高	H高
いつも遊ぶグループがある	.009	.082	.115 *
悩みは友達に相談する	.167 *	-.005	-.008
面と向かって話をしたい	-.040	-.021	-.089 +
自分は友だちが多い	.039	.054	.062
ケータイ等は使いこなせる	-.133 +	-.060	-.087 +
ケータイがないと不安	-.012	-.105	.046
中学時代いじめられていた	-.216 **	-.243 **	-.134 **
中学校は荒れていた	-.129 *	-.120 +	-.033
家族との会話は多い	.023	-.071	.088
友達との会話はSNSが多い	-.128 *	.081	.027
学校のことを保護者に話す	-.368 **	.268 *	.059
友人のことを保護者に話す	.265 *	-.206 +	-.068
ケータイのことを保護者に話す	.094	.041	.070
配布プリントを保護者に渡す	-.027	.030	.015
朝起きたら家族にあいさつ	-.137 *	.001	-.067
朝食は保護者と一緒に食べる	-.005	.221 **	-.045
夕食は保護者と一緒に食べる	.172 *	-.156 *	-.007
一人より友だちと一緒に楽しい	-.014	-.015	.056
外へ出かけることが多い	-.052	-.092	-.023
近所の人にあったら挨拶する	-.001	.034	-.011
自分は「いじられキャラ」	-.001	-.116	-.052
R ²	.210	.188	.067

(※G高については分析する上で必要な回答が得られなかったため除外)

でもtwitterやLINEをよく利用する生徒はネットいじめに遭うリスクが高くなっていたが、多様校については必ずしもそうではないことがわかる。むしろ、G高やH高ではtwitterを利用している生徒のネットいじめのリスクはそうでない生徒よりも低くなっているのである。LINEによるネットいじめのリスクはH高のみ見られるだけで、他校では有意差は見られなかった。

すなわち、多様校では進学校よりも具体的にどのようなアプリを使っているのかによってネットいじめの被害のリスクに大きな差が生じているのである。ゆえに、多様校においては、ネットいじめの被害を抑止するために、子どもたちの利用アプリとネットいじめの関係性について精緻に分析する必要がある。たとえば、H高ではLINEの利用を注意喚起すればネットいじめにある程度の効果が見込めるが、その他の高校では意味のない指導となる恐れが高いのである。

それでは、個人の特性に焦点を当てた場合、多様校にはどのような特徴が見られるのであろうか。表9は表7と同様の分析をE高、F高、H高に行った結果である。

これをみると、進学校と同様に「中学時代にいじめられていた」生徒はどの学校であってもネットいじめの被害に遭うリスクは高くなることがわかる。高校生調査全体で見たとき、ネットいじめの被害はおおよそリアルな世界のいじめの被害と同じ集団であるというみなしが成立する。どの学校においてもネットいじめの被害に遭うリスクが高くなっており、それらの β 値がすべて有意差をもつことからそれが検証できるのである。

次にネットいじめの低いH高の特徴としては、遊ぶグループが固定化している生徒ほどネットいじめに遭うリスクが低くなっていることが指摘できる。現代のいじめの特徴として一定の人間関係があるグループ内でいじめの関係

が進行することが指摘されている⁽¹⁰⁾が、H高においては、グループによるいじめがあまり見られないと考えられる。すなわち、現代のいじめの構造がH高にはあてはまらず、グループ内の人間関係は極めて良好であることが想定できる。逆に、グループに所属できず、孤立している生徒にネットいじめのリスクが高くなっていると考えられよう。ゆえに、H高でのネットいじめのリスクは「グループを持たないこと」だともいえるのである。

また、H高については、本調査の高校のなかで唯一の郊外の学校であることもネットいじめの低さに影響を与えていることが考えられる。E高やF高では「中学校が荒れていた」ことはネットいじめのリスクを高めているが、H高にはこの傾向が見られないことから、地域性の問題がネットいじめに何らかの影響を与えていることは視野に入れなければならない。

Ⅲ. 高校におけるネットいじめに対する生徒指導を考える

本論文では「進学校と多様校ではネットいじめの質と量に差が見られる」という仮説をもとに分析を行ってきた。その結果、ネットいじめの量については進学校（平均7.3%）と多様校（平均9.2%）で大きな差を見出すことはできなかった。しかし、ネットいじめの質について、進学校は個人情報流出（A高：8.0%、B高：19.0%、C高：17.9%）が高い一方で、多様校はブログやプロフでの悪口（E高：42.9%、F高：24.0%、G高：55.6%、H高：79.3%）が多いことが明らかになった。すなわち、進学校では書き込みが特定されない形で行われているのに対し、多様校では、誰が書き込みをしたのかわかるものが多いのである。

以上から、本調査によって明らかになった知見は以下のとおりである。

1. ケータイの所有の有無によってネットいじめの高低には影響を与えていない
2. ケータイの所有開始時期が遅い生徒ほどネットいじめに遭うリスクは低くなる
3. 学校によってアプリの利用率には大きな差が見られるが、LINEは7割以上、twitterは5割以上の高校生が利用しており、生徒指導上の問題も発生しやすい
4. どの学校であっても「いじめられっ子だった」生徒にネットいじめに遭っている割合が高くなっていること
5. 進学校ではアプリの利用を規制することによってネットいじめを減じることが見込めるが、多様校においては、必ずしも期待する効果を得ることができないこと
6. ネットいじめの発生率が低い学校では「面と向かって話したい」「親と一緒に夕食を取る」などの対面でのコミュニケーションをとる生徒の割合が高く、それがネットいじめの発生抑止につながっていること

これら6つの知見から、生徒指導をする際の「予見」として、いじめ・いじめられの構造をみた場合、ネットいじめを受ける生徒の多くはリアルの世界でもいじめを受けている生徒であることが明らかとなった。つまり、子どもたちにとって、教室とネットの中には境界線がなく、教室でのからかいや悪口がネットの世界にもみられるのである。それは、進学校や多様校といった高校階層によるものではなく、子ども全体に同様の傾向があることを指摘できる。加納寛子（2011）は、ネットでの自分と現実世界の自分を偽ることが多い大人に比べて、子どもはネットと現実世界に断点がなく、自分の顔写真をネットで公開し、日常生活をSNSに書き込んでいることを指摘している。⁽¹¹⁾ ネットとリアルの世界が連動していることにより、ネットいじめの深刻さが増していることを加納は警告している。本論文のデータをみても、高校生の

SNS加入率は高く、その多くは本名でアカウントを作成していることが想定される。したがって、ネット上に書き込まれた悪口は書かれた対象をよく知る人物からの書き込みであり、直接顔を合わせて話をするよりも気軽にいじめに参加できる。ネットいじめの怖さはここにある。

最後に、まとめにかえて、ネットいじめについて「高校階層別の生徒指導」という視点から若干の考察を加えて本稿を終えたい。結論からいえば、進学校におけるネットいじめは、個人情報や画像流出といった個人を「さらす」タイプのいじめが多様校に比べて多い。個人情報をネット上に流すことで、他者の行動を「あいつはこんな趣味があったのか」といったような嘲笑の対象として「さらす」のである。その情報を多くの「仲間」に拡散させる背景にも、万が一、いじめが発覚した場合に、「この書き込みを笑ったのは僕だけではありません」と自分の罪を軽く（拡散させる）することもできているところに進学校のネットいじめの指導の難しさがうかがえる。また、自由記述の書き込みでは、「ネットいじめは個人の責任」「ネットに書かれていることなんて気にしなくてもいいのに」「自分がしっかりしていればネットいじめには遭わない」といった自己責任という見方が強いのも、進学校の特徴であった。ネット上できちんと対処していれば、ネットいじめには遭わないはずだという意識が強く、もしいじめに遭うことがあればそれは本人の問題である、といった考えがあるようである。

一方で、多様校におけるネットいじめは、ブログやプロフ、メールでの中傷といった個人に直接攻撃するいじめが多くを占めている実態がある。こうしたネットいじめは発見も早く、深刻なケースを引き起こすことも少ない。書き込んだ本人も「自分がやりました」と素直に認めることが予想できる。進学校のように「他にも自分と同じような書き込みをしている」といっ

たことを口にすることは少なく、「自分がすべて悪いです。他に悪口を書いた人はいません」といった友人関係を持っているからこそ、友人をかばうような発言も予想できる。自由記述においても、進学校の生徒とは全く異なる意見を持っていた。ネットいじめは「本人同士で解決できる問題ではないと思う」「大人や社会が法律などできちんとしないといけない」とその解決は社会で考えなければならないという意見が多く見られた。なかには、ネットいじめの被害者は「やめてほしいと直接お願いしても、逆にネットでもっと書かれてしまった。自分で何とかするのは無理だ」という諦観した気持ちを記入したのもあった。ネット上で自分の悪口を書かれることが、どのような不利益を被るのか、それを自分たちで断ち切ることの難しさに気付いているからこそ、このような書き込みでSOSを求めているのかもしれない。

ネットいじめはどの学校でも起こり得る問題である。しかし、その発生の割合や質には学校によって大きな差異がみられる。学校ごとに実態をきちんと把握したうえで、ネットいじめの対応策を講じなければ、かえってそうした行為を誘発しかねないという逆効果を招いてしまうことが憂慮される。「いじめ防止対策推進法」が施行されたことにより、いじめの実態をより正確に把握できるような体制が整ったから今だからこそ、学校現場の「リアル」に添った対応策が求められるという視点を忘れてはならない。

【付記】

本研究は公益財団法人大川情報通信基金研究助成「ネットいじめの実態とそれを誘発する要因をめぐ

実証的研究」(研究代表者:原清治、2013-2014)、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(c)「ネットいじめの実態と学校の『荒れ』との関連をめぐらる実証的研究」(研究代表者:原清治、2012-2015)および佛教大学特別研究費(2013-2014)として行っている研究の成果の一部であり、日本実践教育学会第17回大会(2011.11.2、於:鳴門教育大学)および関西教育学会第66回大会(2011.11.16、於:滋賀大学)における発表をもとに加筆修正したものである。

なお、本稿はⅠ、Ⅲを原が、抄録、Ⅱを浅田が担当したが、その責任は両者が等しく負うものである。

【注記】

- (1) 文部科学省「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2014 (http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&tclassID=000001055973&cycleCode=0&requestSender=estat 2015.1.30 アクセス)
- (2) 森田洋司・清永賢二『新訂版いじめ 教室の病い』金子書房、1994、pp.21-28
- (3) 内藤朝雄『いじめの構造』講談社現代新書、2009、pp.31-41
- (4) 宮台真司『制服少女たちの選択』講談社、1994、pp.243-274
- (5) 同上、pp.246-247
- (6) 同上、p.247
- (7) 鈴木翔『教室内(スクール)カースト』光文社新書、2012、pp.25-34
- (8) 本田由紀『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版、2005、p.22
- (9) 原清治・山内乾史『ネットいじめはなぜ「痛い」のか』ミネルヴァ書房、2011、pp.37-61
- (10) 同上、pp.12-18
- (11) 加納寛子「ネットいじめを解決する鍵のありか」『現代のエスプリ』No.52、ぎょうせい、2011、pp.7-10

【参考文献】

伊藤茂樹『リーディングス日本の教育と社会⑧いじめ・不登校』日本図書センター 2007年

下田博次『学校裏サイト』東洋経済新報社 2008年
内藤朝雄『いじめの構造』講談社 2009年
原清治・山内乾史『ネットいじめはなぜ「痛い」のか』
ミネルヴァ書房 2011年
藤川大祐『ケータイ世界の子どもたち』講談社
2008年
藤川大祐『いじめで子どもが壊れる前に』角川書店
2012年
本田由紀『若者の気分 学校の「空気」』岩波書店
2011年
森田洋司・清永賢二『新訂版いじめ 教室の病い』
金子書房 1994年
森田洋司『いじめとは何か』中央公論新社 2010年
『改めて「いじめ対応」を考える』児童心理2013年8
月号臨時増刊No.972
宮台真司『日本の難点』幻冬舎新書、2009年
文部科学省「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒
指導上の諸問題に関する調査」2014年